

## 淡路の誇れる芸能「淡路人形浄瑠璃」について

淡路三原高校 2 年

近藤 翔

この論文の募集テーマとなっている「故郷の誇ること」について、僕の故郷、淡路島で誇れるものは「淡路人形浄瑠璃」ではないかと思います。その理由や他の文楽などの人形浄瑠璃と比べたときに長けていると思う点を書いていこうと思います。

僕は、淡路人形浄瑠璃の特徴は何をとっても派手であるということだと思います。淡路人形は他の文楽などに比べ比較的人形が大きくなっています。その人形に大きさがあることで他にはない「迫力」が出てくるのだと思います。その迫力をいかした「時代物」の上演。たとえば「一谷嫩軍記」「絵本太功記」「賤ヶ嶽本槍」などたくさん演目があります。この「迫力」こそ淡路人形浄瑠璃の誇れる点ではないかと思います。

次に、淡路人形浄瑠璃独特の舞台演出についてです。淡路人形浄瑠璃には「大道具返し」という、淡路独特の舞台演出が今もなお受け継がれています。これは、襖仕掛けで、遠近法の目の錯覚を楽しむというようなものです。襖が何枚も何枚も開いていき、最後には、千畳敷が現れます。なぜこのような舞台演出が出来たのかといいますと、諸説ありますが、淡路人形は昔日本全国で巡業の旅をしていました。その時に野掛小屋で公演していたのでどうしても舞台転換が見えてしまいます。それならいっそ見せてしまおうということでこの「大道具返し」が出来たといわれています。この「大道具返し」は全国巡業をしていた淡路人形だからこそ生まれた演出の一つです。

これは、淡路島にとって非常に大きな財産であり、未来に受け継いでいかなければならないものだと思います。しかし、近年は、「淡路人形浄瑠璃」の後継者不足が大きな課題に挙げられます。そもそもこの淡路島に住んでいながらも、その「淡路人形浄瑠璃」がどのようなものか知らない。そんな若い人が多くいます。こんな事でこの郷土のすばらしい伝統は守っていけるのでしょうか。まず、地元の若い人に「淡路人形浄瑠璃」の魅力を知ってもらおう。それで興味を持った人が他の人に教える。それが、このすばらしい淡路島の伝統を百年、二百年、さらに未来へと残していくための大きな一歩になるだろうと思います。

今は、「淡路人形浄瑠璃＝文楽」というような印象を持つ人が多くいますが、これが、いつか「人形浄瑠璃＝淡路人形浄瑠璃」というような時代がくるといいなと思います。